

シンガポール国立大学における SEND プログラムの実践

—語学教育研究センター日本語プログラム—

浜崎 譲・ウォーカー 泉・大塚 陽子・北井 佐枝子

要 旨

シンガポール国立大学語学教育研究センター日本語プログラムでは、2012 年のパイロットプログラムから SEND プログラムに参加し、2015 年度には早稲田大学の大学院生を 2 人受け入れ、本学の日本語履修者 15 人を早稲田短期日本語集中プログラムに送り出した。本稿では、その実践の概要を中心に報告し、過去 4 年間の活動を踏まえ、SEND プログラムの意義と展望を述べる。

キーワード

SEND プログラム 授業見学 模擬授業 協働

1. 実践の概要

シンガポール国立大学語学教育研究センター日本語プログラム（以下、「本プログラム」）では、日本語教育の実践能力向上に寄与することを目的として、日本語教育の知識・経験を持つ早稲田大学の大学院生を中心に受け入れてきた。一方、本プログラムで日本語を履修している大学生を、早稲田大学の夏期短期日本語集中プログラムへ送り出してきた。そこで本稿では、早稲田大学からの参加者を「研修生」、受け入れ期間を「研修（期間）」、夏季短期日本語集中プログラムを「短期プログラム」と呼び、その概要について報告する。

1.1 インバウンド：早稲田大学からの研修生の本プログラムでの実践

本学では、大学の制約により研修生が正規のクラスを担当することや、その時間を使って活動することが難しいため、授業見学、模擬授業を活動の主な柱とした。そして、それに関わる計画・準備、受け入れモジュール内での補助業務に加え、文化交流活動を研修内容とした。研修を始めるにあたっては、来星前に両大学の担当教員が研修生の専門や希望をもとに模擬授業の内容について話し合い、本プログラムでの状況を踏まえながら、文法項目やトピックなど模擬授業の方向性を決定した。それにより、配属するモジュールを選定した。そして、研修前半には授業見学を行った。これは、模擬授業で対象となる日本語学習者のレベルや特性を知るとともに、本プログラムに求められる教師の役割を理解す

る上で重要な意味があった。従って、授業見学は模擬授業を行うモジュールに優先順位はあったものの、他のレベルのクラスも見学できるよう教員全員に協力を求めている。また、授業を漠然と見るのではなく目的意識を持って見学、あるいは、参与観察できるよう、さらに、授業見学到協力してくれた教師の自己啓発になるよう、振り返りシートに見学を通して気付いた点や感想などを記入してもらい、担当教師にも渡した。

受け入れ時期の決定については、滞在期間3週間弱のうち、模擬授業が大学の中間休みに位置づけられるよう調整した。中間休み中は授業がないため、専攻の異なる日本語学習者にとっても参加しやすいからである。そして、学生たちには研修生の受け入れ前から模擬授業について知らせ、研修開始後には研修生自らが講義に入って参加を呼び掛けられるよう、また、そのための広報資料の作成を通して日本語学習者の日本語能力レベルが理解できるよう支援した。

研修生は来星前に早稲田大学側のコース内で授業計画をある程度練ってきているため、こちらでは授業を見学し、担当教員と直接話をしながら具体的な計画をしていくことが主な作業となった。実践内容としては、いわゆる日本語の授業（「文字の導入」「接続詞」「オノマトペ」「スピーチスタイル」）と、文化活動的な授業、例えば、「ヘアスタイル紹介」「ファッション紹介」、「紙芝居」「手巻きずし作り」や「ちぎり絵」などが行われた。従って、本プログラムの初級レベルからビジネス日本語を含む中上級レベルに及ぶ多岐に渡るレベルで実践が行われてきたが、いずれの実践も、それぞれのレベルに応じた適切な語彙や文型の使用を基本として実践できるよう支援した。

授業見学や模擬授業以外の時間には、大学の茶道部や日本舞踊クラブなどにも参加し、部員との交流を行う研修生もいた。

1.2 アウトバウンド：本プログラム学生の早稲田短期日本語集中プログラムへの参加

短期日本語集中プログラムには、2013年には14名、2014年には19名、2015年と2016年には15名の学部生が参加した。早稲田大学の担当者と協力し、こちらでは広報、参加学生の選抜、申し込み手続きの補佐業務などを行った。このような短期プログラムは本プログラムの学生の日本語学習の動機づけに有効であると考え、特に本プログラム初級レベルの学習者を対象に参加を募った。また短期プログラムの成果を知るために、参加学生には事後アンケートと感想文の提出を義務付けた。

2. 実践の成果

2.1 インバウンド：早稲田大学からの研修生の本プログラムでの実践

シンガポール国立大学では、研修前半には配属モジュールを中心に授業見学や教務の補助、後半に模擬授業を実践してもらったが、他の授業で多忙な学生たちに模擬授業への参加を促すことは容易ではなかった。しかし、実際に参加した学生たちからは、どの模擬授業也非常に好評だった。

例えば、2015年度には研修生2名（大学院生）が日本語3に入り、模擬授業を2回行った。1回目には20名程度、2回目には15名程度の学生が参加した。研修生の多くは留学

生であったため、日本在住という立場や自らの留学経験を生かした実践を行うことができた。例えば、「日本での買い物（ファッションに関する言葉と買い物の会話）」とし、渋谷での買い物、店員と客を想定した会話で構成した授業だった。初級の教科書にあるような買い物の会話から少し踏み込み、どんな感じの服を探しているのか、どんな時に着ていく服を探しているのかなどの情報、また、店員がよく使う独特の言い回しや、現在人気のあるアイテムなどを取り入れ、若い感性を生かした実践が行われた。本学では、日本のドラマやアニメなどの影響から、教科書では勉強しないような表現に関心がある学生も少なくない。特に日本の若者文化に興味がある学生などは、日本のファッションに一層興味をそそられたようだ。また、語彙や文型の制約が大きい日本語 1 の学生には、文化活動の一つとして「ちぎり絵」を作る活動を実践してくれた。こちらにも 2 回の授業にそれぞれ 15 名程度の学生が集まり、簡単な初級の日本語と英語を使いながら、活動を楽しんだ。

授業での学びに加えて、研修生との交流もさまざまな成果をもたらした。まず、本プログラムでの学習者は、教員以外の日本語話者との接触が限られている上、年齢が近い日本語話者と接する機会は一層少ないため、それが非常に新鮮だったようだ。また、「先生」という立場とは異なる大学院生の立場に共感し、彼女たちの研修がうまくいくように「協力したい」や、「応援したい」というような気持ちも持っていたようだ。そのため、クラス以外でもキャンパスの案内をしたり、一緒に昼ご飯を食べたりする学生もいた。特に日本への留学を考えている学生にとっては、日本での留学経験について情報や意見を聞くよい機会となった。

さらに、本プログラムが受け入れた SEND 研修生は日本語非母語話者が大半であったが、それが功を奏した部分も大きい。例えば、2013 年は中国人と韓国人 1 名ずつ、2014 年は中国人 1 人、日本人 2 人、2015 年は 2 人とも中国人であったが、同じ母語を持った研修生が流暢な日本語を話している姿を見て、驚きを隠せない学生が多かった。特に、国内の大学には日本語の教員養成プログラムが存在せず、日本語教師の大半も日本語母語話者であるというシンガポールの日本語学習環境に置かれている学生たちにとっては、日本語を実際に教える側に立つほどのレベルに到達している彼らを目標として捉えることができ、自己の学習動機が強まったようである。

2.2 アウトバウンド：本プログラム学生の早稲田短期日本語集中プログラムへの参加

短期プログラムに参加した学生からの事後アンケートによると、全体的に実施時期や滞在先の環境などは評価が高かった。特に、他国からの学生たちと知り合い学ぶ機会があったことは有意義な経験としてあげられている。一方で、参加費や文化活動、寮の場所などについては改善の余地があると考えた学生の意見も少なからずあった。とくに 2016 年の短期プログラム後のアンケートでは、文化活動については 5 段階中 1 や 2 を選択している学生が多く、満足していなかったことが窺える。また、もっと日本人との交流を増やして欲しいとの要望も見られた。とはいえ、また機会があればこのような短期プログラムに参加したいという前向きな意見が大半を占めていた。さらに、2016 年から Skill based subject が選択制となったが、本学の学生が選択した科目は全て聴解と会話であった。以上から、短期プログラムへの参加の主な目的は、授業、および、文化活動や日本人との交

流を通して聴解と会話能力を向上することであることもわかった。

また、長期的な成果として、過去4年間の短期プログラムへの参加者の多くが上級レベルまで日本語学習を継続していることから、日本語学習の強い動機付けになっていると考えられる。SEND プログラムに期待される効果として、「個人の国際化・グローバル化に貢献」(中川・西原・宮崎 2014)があげられ、長期的プログラムへの参加が少ないと懸念されているが、短期プログラムはそのきっかけとなるのではないだろうか。

3. SEND プログラムの意義と今後への提言

SEND プログラムは、早稲田大学にとっても提携校である本学にとっても、継続する意義は十分にあると考える。まず、本プログラムでの研修の意義としては、日本語を教えるという仕事を将来のキャリア選択の一つとして考えている参加者が、海外で行われている日本語教育の現場に入り、実際の授業を見学し、模擬授業という形で教壇に立つ機会を得て、さらに、自らの実践について複数の教師からフィードバックを得られるという機会は、貴重であると思われる。特に、本プログラムのように毎学期700名前後の学習者を対象に、経験豊かな教師が初級から上級までのクラスを提供しているプログラムにおいては、現場の日本語教育の現状を理解する上で、有意義な経験となるであろう。さらに、他の多くの外国語との競合などの中で、日々の授業を通して切磋琢磨している現場の教師と交流することで、日本語教育の置かれている立場や、日本語教師という仕事に対する理解も深めることもできると思われる。一方、本プログラムの教師にとっても、日本からの若い研修生を受け入れることにより、自分たちの実践を振り返り、改善に繋がる良い機会になると言えよう。本プログラムの日本語学習者にとっても、2. で述べたとおり、多様な意義があると考えられる。

次に、早稲田短期日本語集中プログラムへの参加の第一の意義は、日本語学習継続の動機付けになるという点が挙げられる。しかし、年々日本各地の大学で短期プログラムが行われるようになり、費用的にも魅力的なプログラムが増えていることから、参加者を募ることが難しい状況になってきている。早稲田大学というネームバリュー、そして、東京という地の利から参加を決める学生もいるが、東京には個人旅行でも自由に行けるようになったシンガポール人学生を惹きつけるためには、参加者からのフィードバックを踏まえたプログラムの一層の充実が期待される。

シンガポール国立大学は、2016年の the Quacquarelli Symonds (QS) University Rankings¹では世界で12位、アジアで1位、the Times Higher Education Asia University Rankings²でもアジアの大学で1位にランキングされた。この背景には、大学の戦略として世界のトップ大学との提携により学生の流動性を高めるだけでなく、リサーチや専門分野でも積極的にその分野の優良企業、大学などとの研究協力などを行い、確実に世界展開力をつけてきたという事実がある。また、現在学部生の8割3が在学中に何らかの形で海外経験をしており、インターンシップや交換留学の機会がさらに増えている。そのような環境下で、学生たちは、数ある選択肢の中から、自分の単位取得や経験、就職など様々な要因を考慮し、最も有益だと思われるプログラムを選び、そこに限られた時間やお金を使

う。世界経済が不安定な今、学生たちはさらに慎重にそのような選択をしていくことが予測される。従って、内容、費用を含め、学生が参加価値を見いだせるような付加価値をもった魅力的なプログラムを提供することが、一層重要となってくる。

その成功の一つの鍵は、SEND プログラムの構想の一部でもある早稲田大学と ASEAN 諸大学の「協働」(宮崎、川上 2015)をいかに活性化させるかであろう。これについては、2015 年にタイのチュラーロンコーン大学で行われた SEND 共同評価委員会の席において、西原鈴子氏が重要な提言をされた。それは、プログラムにかかわる個人(教員、研修生、学生)たちが、各自の役割・立場によって決められた仕事の枠組みを乗り越えて、それぞれ何ができるかを自主的に考え、対話により積極的に重なりを作り、一緒に作り上げるというような気持ちが大切だということである。その意味から、「協同」ではなく、まさに「協働」がふさわしいということである。

これまでの SEND プログラムを振り返ると、開始当初は、双方の教育機関に対する理解不足や、SEND プログラムへの期待の異なり、活動内容に関する制約や条件などから、多様な問題が生じた。しかし、毎年プログラムを重ねていく中で、さまざまな対話を通して双方の理解が深まり、ある程度の「協働」も行われた。その結果、インバウンド・アウトバウンドともに、スムーズに行えるようになり、それぞれの実践の成果も高まってきていると実感している。早稲田大学においても、提携先の各大学の特色や相違点への理解も深まったことと思われる。そのような知見の広がりや相互理解が、SEND プログラムの一つの大きな成果であると言えよう。しかしながら、それぞれの立場からの自主的な「協働」については、更なる努力が必要であり、新たな展開の可能性も秘められていると思われる。

以上、SEND プログラムは、早稲田大学にも海外の大学にも大変意義のあるプログラムで、築き上げてきたものも大きい。独立したプログラムへの移行は、運営経費などを含め容易ではないだろう。今後の継続と更なる発展には、これまでの実践を踏まえ、各大学がそれぞれの立場から何ができるかを再考することが重要であろう。そして、これまでの蓄積をもとに、それぞれの教育機関の特長を十分に活かしたプログラムを「協働」していくことが重要であると考えられる。

注

- 1 「QS World University Rankings2016」
[<http://www.topuniversities.com/university-rankings/world-university-rankings/2016>] (2016 年 9 月 9 日)
- 2 「The Times Higher Education World University Rankings」
[https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/2016/regional-ranking#!/page/0/length/25/sort_by/rank_label/sort_order/asc/cols/rank_only] (2016 年 9 月 9 日)
- 3 「シンガポール国立大学 Study-abroad programs」[<http://www.nus.edu.sg/education>]

参考文献

宮崎里司・川上郁雄 (2015) 「SEND プログラムを通して求められる能力とは—日本語教育とグロー

バル化一」『早稲田日本語教育学』17-18、pp.1-8.

中川正春・西原鈴子・宮崎里司（2015）「鼎談：グローバル化をめざした大学の世界展開力としての
SENDプログラム」『早稲田日本語教育学』17-18、pp.55-71

（はまさき ゆずる シンガポール国立大学語学教育研究センター）
（うおーかー いずみ シンガポール国立大学語学教育研究センター）
（おおつか ようこ シンガポール国立大学語学教育研究センター）
（きたい さえこ シンガポール国立大学語学教育研究センター）